

大 学 史 研 究 通 信

第 111 号 2025 年 3 月 21 日 (金)

大学史研究会

第 111 号の内容：会員情報、新入会員 自己紹介、大学史研究会 2024 年度書評会 (6 月) 開催報告、大学史研究会例会 開催概要、2024 年度第 47 回大学史研究セミナー報告、『大学史研究』編集委員会からのお知らせ、2024 年度総会報告について、2024 年度会計報告について、運営委員会委員長としての抱負、会員新刊ニュース、編集後記、大学史研究会運営委員・事務局員一覧

会員情報

新入会員 (順不同)

大隈 楽 会員

(所属：京都大学大学院・院生)

片山 里沙子 会員

(所属：津田塾大学大学院・院生)

堀 雅晴 会員

(所属：立命館大学)

新入会員 自己紹介

大隈 楽 会員

学生にとっての大学自治や学問の自由を歴史的に検討することに関心があります。特に、戦前からの系譜の中で厚生補導の制度がどう形作られてきたのか、その中で学生の自治や自由はどう位置づけられてきたのかを明らかにしたいと考えています。現在は、1920 年代中盤から 1930 年代中盤にかけての帝国大学を対象に研究を進めているところですが、今後は戦後との連続・断絶も含めて研究していきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひします。

片山 里沙子 会員

この度入会いたしました片山里沙子と申します。津田塾大学大学院博士課程に在籍し、19 世紀後半から 20 世紀前半の日米女子高等教育史を研究しております。特に、日本初の私立女子高等教育機関の一つである女子英学塾に注目し、創立者のライフヒストリー研究と同時代の高等教育機関との比較を通じて、その革新性を考察しています。教育史の研究経験は浅いですが、皆様のご指導を仰ぎながら学びを深めてまいります。何卒よろしくお願ひいたします。

堀 雅晴 会員

現代行政学研究として各種ガバナンスの制度と実態に関心をもっております。以前には CI & E「大学法試案要綱」で指摘されてこなかった中央管理機構を検討しました。最近私学法改正を 1949 年公布にまで遡って、理事長・理事会と評議員会の「関係性」理解を検討し、結論として全構成員自治に基づいてこそ「私立学校の特性」(同一条)を全面的に体现するものとなることを突き止めました。ご笑覧いただける方、ご連絡ください。

(会員情報担当：原圭寛)

大学史研究会 2024 年度書評会（6 月）開催報告

会員の博士論文出版を受けて企画した第 2 回書評会（菅原慶子『「象牙の塔」と「生ける社会」の結びめ：明治期東大・早稲田の学術普及からみた大学理念』東京大学出版会、2024 年）を、6 月 21 日（金）18：45～20：15 に、青山学院大学（青山キャンパス）にてハイブリッド形式で実施しました。前回同様、“若手応援企画”として、将来博士論文を執筆し単行本として刊行したいと思っている大学院生あるいは若手研究者に有益な情報を提供するという趣旨のもとに開催いたしました。

参加者は 26 名（対面 15 名＋オンライン 11 名）で、菅原会員からの報告の後、活発な議論が行われました。今回は東大、一橋大、京大、広大、青学の大学院生 12 名が参加していただきましたが、職場と家庭で様々な責任を抱えながら博士論文を執筆し、かつ書籍として刊行した菅原会員の経験談から、何らかのヒントを得ることができたのではないかと思います。なお、書評会のあとには、近くの中華料理屋で懇親会を開催しました。

（前セミナー担当：山本珠美）

大学史研究会 2024 年度第 2 回菅原慶子『「象牙の塔」と「生ける社会」の結びめ』レポート
菅原慶子（東京大学）

2024 年 6 月 21 日青山学院大学にて開催いただいた第 2 回書評会では、若手研究者応援という趣旨のもと、拙著『「象牙の塔」と「生ける社会」の結びめ』の報告及びそれへの書評、そして博士論文執筆から出版までの経験を報告する機会をいただいた。当日は会場及びオンラインにて多くの会員・非会員の皆様に参加いただき貴重なご議論をいただいた。

（1）本書の目的

日本における大学理念は、社会からの要求を認識するとともに、それらとの自由・自立の相克のなかで成立してきた。しかし、社会と向き合う大学の姿の探究について、大学史研究や高等教育研究ではほとんど着手されてこなかった。一方、現代に至る大学改革において社会の要請に応じることが重視されるが、その議論の前提には、戦前日本の大学は専ら「象牙の塔」になることだけを志向したという偏ったイメージがある。

本書は、日本の大学が社会とその構成員である一般の人びとに働きかけた活動を実証することを通じて、日本の近代大学の新たな姿を提示すること、そして大学の対社会的活動の日本モデルの原初形態を批判的に探究することを目指したものである。

（2）各章の主な内容

第 1 章から第 6 章までは、それぞれ東京大学及び早稲田大学とその前身校・後身校の明治期における学術普及の取り組みを扱った。東京大学では 1877 年からの法理文三学部演説会を実証し、日本における学術普及の嚆矢とされてきた理医学講談会、その後の大学通俗講談会の導入経緯や社会的背景を検討した。早稲田大学では、創設直後からの同攻会による活動の実態を明らかにし、その後の”University Extension”を標榜した巡回講話や校外教育部の背後にある大学への志向をあぶりだした。そして、第 7 章では、これら両校の活動に官立・私立を含む機関を超えた高等教育関係者の連帯が契機としてあったことを論じた。

（3）結論と考察

本書では、日本における大学の対社会的活動が”University Extension”概念移入以前に遡り、その源流は近代大学制度誕生前後の演説会にあったことを明らかにした。その活動は、大学理念を実現する過程における手段の一つであり、当時の日本の学問の現状に対する危機感ともいえる課題意識を共有した官立・私立を超えた高等教育関係者の連帯が実現したものであった。この系譜の先にある現代の大学において対社会的活動はいかなる意義をもち得るのか、奉仕や貢献ではなく大学経営の一環としていかに意義づけていくのかという課題提示をした。

（4）報告者の博論・出版レポート

報告者は、社会人学生として大学院入学し、2 子の出産・育児と併行しながら博士論文執

筆、その書籍化という機会を得てきた。特異な事例ではあるが、様々なライブイベントや忙しさのなかで研究に向き合われている若手研究者や大学院生の方々と、博士論文執筆や出版助成申請、出版のスケジュール等を情報共有させていただいた。

(5) 書評会での論点

書評会では、時代背景の捉え方から史料の解釈に至るまで多くの重要なご指摘をいただいた。ここではそのうち3点を課題として記しておきたい。

1点目は、比較対象とした事例及び時期のずれである。本書では口述での実践に限ったことで、特に東京大学については大学通俗講談会が終了した明治20年代までとなり、明治期以降も継続した早稲田大学とは大きなずれが生じてしまった。山本珠美氏の研究実績に詳しいとおり、実際にはその後の東京大学において口述以外でも様々な対社会的活動の試みがあった。口述を切り取る意義については、テキストによる実践等との比較により検討していく必要もあり、今後の課題としたい。

2点目は、啓蒙主義や通俗教育といったものの背景となっている戦前期の教育、社会の構図の捉え方についてである。本書では、従来は国家権力と一体とみなされてきた草創期高等教育機関の実は自主的な理念追求という、夢と希望に満ちた大学人の姿に焦点を当てている。だが、知や資源が大きく偏在する社会構図のなかで、本書で扱った取り組みを含めた大学の対社会的活動が、多くの人びとに純粋に歓迎されたとは限らなかったのが現実であろう。そのような大学を巡る社会背景をより細やかに記していく重要性とともに、対社会的活動への着目からこそ見える新しい関係図を描く努力を絶えず続けていくことを忘れないようにしたい。

3点目は、「象牙の塔」や「社会」といったキーワードの定義である。とりわけ、「社会」をどの範囲でどのように定義するのかは、逃れられない課題である。本書では対社会的活動を発信者である大学目線から意義を捉えるためより広い「一般の人びと」を対象としたが、今後は地域や属性を限定し焦点を当てることで、より細やかに成果や意義を検討していきたい。

(6) 謝辞

最後になるが、大学史研究会において貴重な機会をいただいたことに多謝申し上げたい。なかでも、拙著テーマの偉大な先達であり、本企画・コメントをいただいた山本珠美氏に深く感謝申し上げたい。研究の道を走り出したばかりの私にとって、多くの皆様からの温かく細やかなご指導ご批判がいかに大きな励みになったか言葉に尽くせないとともに、大学史というテーマのもと尽きない議論を重ねられるこの大学史研究会の一員でいられる喜びを噛みしめている。

2024年度第47回大学史研究セミナー報告

第47回大学史研究セミナーが、2024年12月7日（土）、8日（日）に長崎女子短期大学にて開催されました。参加者は初日が20名、二日目22名でした。

初日は長崎大学核兵器廃絶研究センター客員研究員の山口響氏に「長崎原爆投下とその前後の大学・高等教育機関」というテーマの下、「原爆による攻撃に長崎の大学・高等教育機関はどうか対応したか。原爆被災がそれぞれの学校にどのような影響を与えたか。」についてご講演いただきました。長崎の大学・高等教育機関として具体的には新制長崎大学（1949年開学）の源流となる諸学校（一部中等教育を含む）である、①長崎医科大学、同大学附属医学専門部、同大学附属薬学専門部（のちの長崎大学医学部（坂本キャンパス）、薬学部（文教キャンパス））、②長崎経済専門学校、長崎工業経営専門学校（のちの長崎大学経済学部（片淵キャンパス））、③長崎師範学校（のちの長崎大学学芸学部〔→教育学部〕（文教キャンパス））が取り上げられました。例えば、空襲の場合に救援の中心となるべき長崎医科大学は、爆心地に近く角尾晋学長を含む多数の犠牲者を出し、救援活動に支障が生じたこと、占領期には米日の原爆調査に医科大学関係者も協力したことなど、各校について詳細にご説明いただき

ました。

2日目の自由研究発表は、原圭寛会員(昭和音楽大学)「アメリカ学士課程史の記述枠組みに関する試論：イェール報告(1828)とハーバード・レッドブック(1945)をつなぐもの」、坂本辰朗会員(創価大学)「ジョーンズ・ホプキンス大学における特別研究員選考制度：デューイとカテルのケーススタディ」、田村幸男会員(学校法人目白学園)「戦時期の仮面浪人一半合法的徴兵忌避の選択一」(※一部、当日変更)、平塚力会員(京都文教大学)「南原繁における学問の自由擁護の思想と戦略」、中野知也会員(東京大学大学院)「中教審「三八答申」までの審議会等における大学教員人事制度に関する議論」、以上5件の報告がありました。参加者からの多くの質問があり、活発な討議が行われました。

ご発表を下さった皆様、参加者の皆様、そして何よりも会場校の船勢肇会員と当日お手伝いをして下さった学生の皆様に、この場をお借りして御礼申し上げます。

(前セミナー担当：山本珠美)

大学史研究会例会 開催概要

大学史研究会では、様々な機会にシンポジウムや例会を開催してきました。2024年も例会として、別府昭郎会員の『大学を問う：初期大学史研究会のあゆみ』(学文社、2024年)を取り上げ、例会を下記の通り開催致しましたので概要を報告致します。当日は別府会員にお越しいただき、コメンテータとして小川智瑞恵会員を迎え、会場にも関心のある方々が参集致しました。終了後は、懇親会も開催された。

日時：2024年11月23日(土・休) 15:30~17:00

場所：中央大学茗荷谷キャンパス

(参考) <https://daigakushi.jp/home/gyoji/gyoji202410.html>

(事務局等)

『大学史研究』編集委員会からのお知らせ

『大学史研究』第34号(2025年12月刊行予定)への投稿を募集しております。「投稿申込」は2025年3月31日、原稿提出は6月30日が締め切りとなります。

会員の皆様からの積極的な投稿をお待ちしております。

【投稿申込方法】

投稿カテゴリーは、論文、研究ノート、史料紹介、書評、図書紹介です。

投稿ご希望の方は、大学史研究会ホームページの「紀要『大学史研究』」にアクセスし、「投稿申込フォーム」に必要事項を入力の上、送信ください。申込後、編集委員会より投稿方法等についてメールでお知らせします。なお、最終的な掲載カテゴリーは、審査の上、編集委員会が判断します。

詳細については、大学史研究会ホームページ、または『大学史研究』巻末の基本方針、執筆要領をご覧ください。

【お願い】

投稿申込後に提出を辞退される場合、6月30日までに、投稿用メールアドレスにて編集委員会までご連絡ください。投稿には本研究会会員であり、入会以来の年会費をすべて納入している必要があります。

(紀要編集委員長：中村勝美)

2024年度総会報告について

セミナー初日の2024年12月7日(土)に、以下の通り、総会を開催致しましたので主な事項を報告致します。なお、対面で出席された会員の皆様には報告内容が重複致しますが、

ご了承ください。

《報告事項》

1. 運営委員会・事務局活動報告

- ・第46回大学史研究セミナー：2023年12月2日（土）、3日（日）、中央大学茗荷谷キャンパスに於いて対面開催。
 - ・第47回大学史研究セミナー：2024年12月7日（土）8日（日）、長崎女子短期大学に於いて対面開催。
 - ・大学史研究会 書評会（5月）：2024年5月19日、青山学院大学に於いて対面開催。
 - ・大学史研究会 書評会（6月）：2024年6月21日、青山学院大学に於いて対面開催。
 - ・大学史研究会 例会 「大学」を問う：2024年11月23日、中央大学茗荷谷キャンパスに於いて対面開催。
-
- ・運営委員会兼事務局会議：計3回（2024年3月11日（青山学院大学）、6月21日（青山学院大学）、11月23日（中央大学茗荷谷キャンパス）、いずれも対面開催）
 - ・運営委員 推薦委員会：2024年9月12日、オンライン開催。
 - ・大学史研究通信：2024年中で計3回発行（109号（3月19日）、110号（7月3日）、セミナー号外（11月15日））。

2. 会員数報告

- ・2024年の会員数：130名（機関会員7を含む）。
- ※会員数は、退会者等があり、若干前後することを断っておく。

3. 日本学術会議協力学術研究団体への加盟について（状況報告）

- ・日本学術会議協力学術研究団体への加盟に向け、2024年11月23日の運営委員会において、書類を確認し、12月5日に書類を提出済。引き続き、手続きを進めていくことが報告。

4. 『大学史研究』のJ-STAGEへの掲載について

- ・現在、査読有の「論文」のみを掲載中。
- ・特集、資料紹介、書評等は査読の有無が確認できない部分があり、掲載見送中。
- ・23号以降についてはデータの問題があるため、再度、冊子からPDFを作成見込み。

5. 紀要編集委員会より報告について

- ・紀要編集委員会より、紀要の編集、刊行予定について報告。
 - ・『大学史研究』第33号は、東信堂より2024年12月刊行。
- [参考] <https://www.toshindo-pub.com/book/91947/>

6. 長期未納者の退会について

- ・2024年10月から運営委員長、運営委員（会計担当）、事務局長で長期未納者の会員継続の意思確認を行うことを決定し、メール審議にて退会に向けた手続きを進めることを決定。
- ・2024年11月に運営委員（会計担当）から該当者8名に連絡を実施。
うち1名から返事があり、未納分の会費が納入。7名について返事等はなく、会員継続の意思が確認できなかったため、2024年11月23日の運営委員会・事務局会議において7名の退会を決定。

7. 次期運営委員 推薦委員会の報告

- ・2024年9月12日に推薦委員会をオンラインで開催。推薦委員は、坂本辰朗、大川一毅、山本珠美（以上は、運営委員兼推薦委員、会員）、蝶慎一（事務局員、会員）、深野政之、福石

賢一、渡辺かよ子（以上、会員）。今回は、現在の運営委員7名全員が改選。推薦委員会からの提案は、以下の通り。

浅沼薫奈（大東文化大学）、坂本辰朗（創価大学）、蝶慎一（香川大学）
戸村理（東北大学）、中村勝美（広島女学院大学）、原圭寛（昭和音楽大学）
福留東土（東京大学） の7名を運営委員候補者とした。

・なお、山崎慎一、山本尚史（運営委員）は、事務局員として次期の運営委員会の業務等を補佐する。

《審議事項》

1. 会則第3章（第9条～第11条）の改正について

大学史研究会会則（2019年11月23日制定） 第11条

第11条 総会は、会員の過半数の出席（委任状出席を含む）によって成立し、出席者の過半数（委任状を含む）によって議案を議決する。

（案）

第3章 総会

第9条 総会では本会の事業及び運営に関する重要事項を審議し、決定する。

第10条 総会は年一回以上開催する。総会では次の事項を審議する。

- （1）前会計年度の活動報告および決算
- （2）当該会計年度の活動方針および予算
- （3）監査報告
- （4）その他、総会が認めたこと

第11条 総会は出席者の過半数（委任状を含む）によって議案を議決する。

・今回改正に向けた審議となった経緯は、当該各条文に関して、委任状を取った例はこれまでになく、総会の運用として実態から大きく異なっていることが運営委員会で確認。そのため、実態に合わせて第3章（第9条～第11条）を以下のように改正するため、上記（案）が提案され、審議の上、改正済。

2. 次期運営委員 候補者について

浅沼薫奈（大東文化大学）、坂本辰朗（創価大学）、蝶慎一（香川大学）
戸村理（東北大学）、中村勝美（広島女学院大学）、原圭寛（昭和音楽大学）
福留東土（東京大学） の7名。

・推薦があった上記7名の会員を運営委員とすることについて審議の上、決定。

3. 運営委員会の構成について

福留東土（東京大学）：運営委員長
坂本辰朗（創価大学）：日本学術会議協力学術研究団体への加盟
蝶慎一（香川大学）：事務局長
戸村理（東北大学）：（担当検討中）
中村勝美（広島女学院大学）：紀要編集委員長
浅沼薫奈（大東文化大学）：紀要編集副委員長
原圭寛（昭和音楽大学）：会計、会員名簿

・運営委員長は運営委員の互選により決定し、事務局長、紀要編集委員長は、審議の上、決定。

4. 事務局体制について

・事務局員（事務局体制）について、決定。

山本尚史（筑紫女学園大学）：日本学術会議協力学術研究団体への加盟にかかる補佐、J-STAGE 関係、山崎慎一（桜美林大学）：会計にかかる補佐

※なお、大学史研究会のHP 更新や、会員名簿等を担当新たな事務局員について検討中。その際は、運営委員会で承認の上、選任を行う可能性あり。

5. 『大学史研究』紀要編集委員会より

・紀要編集委員会の体制について、中村勝美紀要編集委員長より案が提示。審議の上、決定。
・なお、総会時の説明、紹介にはなかったが、総会后、山本尚史前事務局長より吉葉恭行（岡山大学）も編集委員となることのお知らせされた。

中村勝美（広島女学院大学）：紀要編集委員会委員長
浅沼薫奈（大東文化大学）：紀要編集委員会副委員長
木戸裕（元国立国会図書館）：編集委員
間篠剛留（日本大学）：編集委員
藤岡健太郎（九州大学）：編集委員
山本珠美（青山学院大学）：編集委員
吉葉恭行（岡山大学）：編集委員

6. 決算報告及び予算案について

・山崎前運営委員、原運営委員より報告がなされ、審議の上、承認。
・会員から今後の大学史研究会の運営等にかかる財政問題について検討点が挙げられた。
（前事務局長・事務局員：山本尚史、事務局長：蝶慎一）

2024 年度会計報告について

先の総会で承認されました、大学史研究会 2024 年度決算報告並びに 2025 年度予算（2024. 10. 1～2025. 9. 30）につきまして、以下に概要をご報告します。

1. 2024 年度決算報告（2023. 10. 1～2024. 9. 30）

【収入】

一般会計は繰越金を除く収入が 683, 067 円、支出が 833, 309 円となり、収支差は-150, 242 円でした。年会費をお納め下さった会員各位におかれましては、この場を借りてお礼申し上げますとともに、今後も引き続き研究会の発展と円滑な運営のために、年会費納入に対するご理解ご協力をお願い申し上げます。

マイナスの原因は会費の納入率が例年の 43%ほどに下落したところにあります。これは『大学史研究通信』の電子化に伴い、払込票の送付をとりやめたことが原因で、会費納入を失念されている会員が多数おられることが要因と考えられます。

この対策としては、会費未納者へのメールでの督促をこれまでよりも頻度を上げて行い、また長期未納者に対しては払込票の送付などを行うことを検討しています。ご自身の会費納入状況が不明な会員の皆様におかれましては、事務局会計担当までメールにてお知らせください。

報告時点での会員数は131名、新入会員は7名でした。

【支出】

一般会計の主な支出は、事務局会議・交通費が191,260円、通信印刷費が189,737円、セミナー開催経費が43,000円、過年度損益修正が342,141円でした。特に最後の点については、特に最後の点については、会計担当者の交代に伴い、過去の事務局員による立替払いの清算を行った結果生じたもので、年度をまたいでの清算となったため、別項目かつ高額な支出となってしまいました。この清算にあたって、特別会計から相当額を一般会計に組み入れました。この点については監査の先生方にご確認いただき、総会でも説明のうえ承認を得ています。今後は事務局員による立替払いを年度内に清算するよう徹底いたします。

特別会計の支出は、上記一般会計への組み入れが400,000円、紀要『大学史研究』刊行費用が531,110円でした。特に紀要刊行については、昨今の諸物価高騰に伴い、会費の納入率が例年並みに回復したとしても費用的に継続が困難な状況に置かれています。紀要刊行の維持のためには、今後会費の値上げを検討する必要があります。

2. 2025年度予算（2024年10月1日～2025年9月30日）

【収入】

一般会計の収入については、会費の督促強化により、2024年度の未払い分の回収を見込んで800,000円を設定しています。また、『大学史研究』の売り上げは10,000円を設定していますが、刊行1年後のJ-STAGEによるオープン・アクセス化に伴い、バック・ナンバーの売り上げはほとんど見込めない状況となっています。

2025年度については会費の額は据え置きますが、2026年度以降については運営委員会にて値上げを検討してまいります。案が固まりましたら、総会にお諮りいたします。

【支出】

一般会計の主な支出については、事務局会議・交通費として200,000円、通信印刷費として70,000円、セミナー開催経費、謝金として各30,000円を計上しています。通信印刷費については、会費の納入状況が回復しない場合に払込票を一斉送付することを検討しているため、上記金額を設定いたしました。特別会計の支出については、紀要『大学史研究』刊行費用として700,000円を計上しています。

以上、「2023年度会計報告」および「2024年度予算案」につきまして、ご質問ご提案等ございましたら、事務局会計担当までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

（会計担当：原圭寛）

2025年度年会費納入のお願い

大学史研究会の実収入は、会員各位からの年会費に大きくよっております。会員の皆様の円滑な研究会運営へのご協力に感謝申し上げます。年会費は5,000円です。なお、大学院等在学あるいは日本学術振興会特別研究員の各位には、「院生・学生会費」として3,000円が適用されております。年会費を3ヶ年度分以上滞納されている会員には、研究会の継続参加のご意志を年会費納入によって確認できるまでは、大学史研究会からの諸連絡、「研究通信」、「大学史研究」（紀要）等の発送の停止が決定しております。該当する会員へのご連絡はメール等を用いておりますのでご留意願います。当該連絡と入れ違いに年会費を納入いただきました場合には、何卒ご容赦のほどお願い申し上げます。

なお、大学史研究会の会計年度は9月末日が締め日となっており、昨年10月1日より「2025年度」の取扱いとなっております。また、前年度より大学史研究通信の電子化に伴い、振込用紙の送付を取りやめております。ご不便をおかけしますが、銀行等の備え付けの振込用紙か、インターネットバンキングを用いた振り込みをお願い致します。引き続き、大

学史研究会の発展と円滑な運営のため、会員各位のご理解ご協力をお願い申し上げます。

——年会費振込先——

ゆうちょ銀行振替口座 00120-3-47583

[他行からゆうちょ銀行への振込口座番号：〇一九店（店番 019）当座 0047583]

または

三井住友銀行 東池袋支店（店番 671）普通 3456109

（会計担当：原圭寛）

運営委員会委員長としての抱負

「大学史研究会の財政問題の解消に向けて」

推薦委員会からの推挙を受け、2024年12月の総会におきまして運営委員会委員長を拝命しました東京大学の福留東土です。まったくの青天の霹靂で、私のような、研究面でも人格的にも未熟な人間が、歴史ある大学史研究会を代表する立場に立つことなどあってはならないと思います。しかも、尊敬する坂本辰朗先生の後を受けてのことであり、学術的にも年齢的にもあまりに落差が激しすぎると思います。この認識は、最初にお話を聞いた時も現在も変わりません。この研究会には他にもっとこの立場に相応しい方がおられるはずと思います。しかし、これまで大学史研究会から数えきれないほどの学恩を受けてきた身として、推挙を受けた以上はお引き受けすべきと最終的に思い至りました。私は院生であった1999年に入会し、気が付けば4半世紀以上の期間、ほぼ毎年研究セミナーに出席し、研究会の皆様にお世話になってきました。そして、運営委員長をお引き受けする以上は、現在研究会が抱えている課題を克服すべく先頭に立って取り組む所存です。幸いにも頼もしい運営委員の皆さんが支えて下さいます。特に事務局長をお願いすることになった蝶慎一先生とは旧知の仲であり、力を合わせて取り組みたいと思います。

現在、本研究会が抱える最大の課題は財政問題です。坂本先生がご指摘されてきたように、会の年間収入に比して紀要刊行費が高額であり、今のまま手を打たないと、数年で会の財政は赤字に転落することになります。収入を増やし、支出を抑える施策が不可欠です。具体的な施策は現在、運営委員会で検討しています。しかし、どのような施策を取るにせよ、会員の皆様の協力が必要です。ぜひ会員の皆様にこの問題の深刻さを認識いただくとともに、難局を切り抜ける知恵をともに出し合いたいと思います。

財政問題の解決は現実に差し迫った課題であり、あらゆる手段を講じて解消すべき問題です。しかし、そのための手段はできうる限り、学術団体としての使命に相応しいものであるべきと思います。つまり、学術団体の本来の使命である学術の交流と発展を中心的な解決手段と位置付けたいと思います。学術団体としての会の魅力をこれまで以上に高め、それが財政を好転させるという循環を生み出すということです。

本研究会は小さな所帯ですが、実は近年、若手会員が多く入会してくれています。本研究会の魅力を感じてくれているということです。そのことを自覚するとともに、次代を担う研究者の皆さんが本会に関わることで学術上のメリットを受けられることが何より重要です。そのための場作り、環境作りに取り組みたいと思います。

私が事務局の代表をお引き受けしていた時、若手会員交流会を企画したことがありました。2010年のことでした。単発の企画に終わってしまいましたが、13名の若手研究者が集い、楽しい交流の場となりました。その記録は大学史研究通信63号に掲載されています。過去の企画の記憶を思い出しつつ、会員間の交流促進によって居心地のよさを感じてもらい、会への帰属意識と魅力を高めることを意識しつつ取り組みたいと思います。

会員の皆様のご協力、ご助言を切にお願い致します。

（運営委員会委員長：福留東土）

会員新刊ニュース

会員の皆様が執筆された新刊（章を含む）を適宜ご紹介させていただきます。会員の皆様に発行された書籍の情報を以下の記載欄にご紹介を希望される場合は、事務局のメール（jimu-kyoku@daigakushi.jp）宛にその旨をお知らせいただければ幸いです。

- ・田中智子『占領下の学生自治会と学生運動』六花出版、2025年1月。
- ・ロジャー・L・ガイガー、原 圭寛ほか（翻訳）『第二次世界大戦後のアメリカ高等教育：アメリカ高等教育史 II』、2025年3月。
- ・日本高等教育学会会長プロジェクトチーム・羽田貴史（編）『官邸主導時代の高等教育政策 変貌の諸相と課題』、2025年3月。

（事務局長：蝶慎一）

<異動等に伴う会員情報更新の届出をお願い致します>

ご所属や住所等にご変更のある会員は、事務局までお知らせください。ホームページ掲載の「事務局連絡先」フォーマット（Word ファイル、あるいは、PDF ファイル）などもご活用いただけます。現在、会員の皆様へのご案内やご連絡は、主にメールで配信しております。事務局へのご登録が旧アドレスのままの方や、メールアドレスの登録をされていない方は、ご連絡いただきますようご協力をお願い致します。

（参考）<https://www.daigakushi.jp/home/jimu.html>

（事務局長：蝶慎一、事務局）

編集後記

このたび、「大学史研究通信」第 111 号が完成致しました。2024 年 12 月 7 日の総会より、運営委員会・事務局体制が新たにスタート致しました。大学史研究会が持続的な研究会として運営できるよう、創意工夫しながら充実した活動に取り組んで参る所存です。

本号が会員の皆様のお手元にお届けする頃には、日本全国で桜の開花に関するニュースが報じられていると思います。3 月、4 月は卒業・修了と入学の時期であり、別れと出会いの時期でもございます。新緑が目眩しい頃ですが、多くの大学等のキャンパスには新たな大学生活に大きな希望と期待を胸に抱いている新入生が多く入学します。高校から大学に入学する学生にとっては、新たな「大学史」が、今まさに始まります。大学史研究会としても会員の諸活動の充実に真摯に努めて参りたいと考えております。皆様のご支援、ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

(事務局長：蝶慎一)

「大学史研究通信」第 111 号の編集は、事務局長・蝶 慎一（香川大学）が担当致しました。

連絡先：jimu-kyoku@daigakushi.jp

「大学史研究通信」第 111 号は、2025 年 6 月頃発行予定です。

大学史研究会 〈運営委員会代表〉

福留東土

〈事務局連絡先〉

運営委員会・事務局へのお問い合わせは、下記代表 E メールアドレスまでお願い致します

E-mail: jimu-kyoku@daigakushi.jp

浅沼薫奈（大東文化大学）**運営委員**（五十音順）

蝶慎一（香川大学）

坂本辰朗（創価大学）

中村勝美（広島女学院大学）

戸村理（東北大学）

福留東土（東京大学）

原圭寛（昭和音楽大学）

事務局員（五十音順）

山崎慎一（桜美林大学）

山本尚史（筑紫女学園大学）